集汁　豆腐　根若　牛房

ムシツ汁

〔料理談合集〕名目の汁の事

むしつ汁　あつめ汁に似て精物ばかりにてするなり、何にてもいとはず入てにるなり、數入るほどよし、

シユミセン汁

〔料理物語　汁〕ゑゆみせん　菜も豆腐もいかにもこまかにきりたるをいふ、みそしるにだしくはふ、

〔嬉遊笑覽十上飲食〕三峯尖、○略中庖丁聞書に、三峯膳の羹は、五斗土器に羹三色杉盛にして出すなり、此三色は須彌の三峯に表し盛なり、四季を一季づゝ殘し、過去現在未來にかたどり、其時節に色どるなりと有り、思ふにその色は、北は黃に南は青し、東白西紅に染色の山、此歌謠曲の歌占に、須彌山の歌と有り、日本紀通證にも、出所定かならず泉式部が歌と云どもといふは、須彌山の歌といへり、これを春夏秋冬に配し用、たとへば春の時ならば、これを現在とし、冬を過去とし、夏を未來とする盛かたと見えたり、料理物語に、しゆみせんといふ汁あり、菜も豆腐もいかにも細かにきりたるをいふ、みそ汁にだし加ふといへり、是も三峯にならひたる物なるべし、

博奕汁

〔料理物語　汁〕ばくちじる　たうふさいのめにきる事、汁同、

〔嬉遊笑覽十上飲食〕ばくち汁は、望一后の千句、あつまるは同じばくちの類にして、瓜やなすびや夕顏の汁、思ふに何にまれ小く四角に切たるを采のめと云、これを汁のみとするなり、

サク〳〵汁

〔嬉遊笑覽十上飲食〕さく〳〵汁、世話盡四予正月七日に或天台宗へ參侍て、菜汁を振まはれて云、寺でくふ〳〵じやくざくの菜汁かな、菜を麁相に切てせしむるを、世人詞にさく〳〵汁といへり、又彼宗の根本空々寂々之法を以肝要とす、然をじやくざくといひしは兩意の挨拶なるべき歟、料理物語に蓬をさく〳〵に切などいへり、菜を切る音なり、世話盡は、承應三年の撰なり、